

ナポリ

倉田 稔

目次

はじめに バス観光 カステル・ヌオヴォ 有名カフェでの珍事 カメオ エルモ城
帰る ナポリの政治史

はじめに

ナポリは、北緯40・50度のイタリアにある。チレニア海の一部であるナポリ湾に面する。市内は人口89万人、都市圏人口は300万人の大都会で、イタリアで第3位の大きさである。東にヴェスヴィオ火山があり、それをこえると古代都市ポンペイがある。南30kmにカプリ島があり、青の洞窟で有名である。

市内では、王宮パラッツォ・レアル(17世紀に建設)、国立考古学博物館、旧王宮国立カポディモニア美術館、カテドラル、ドゥオーモ、卵城、サンタルチア地域が有名である。

2015年10月21日 我々はローマ・テルミニ駅から10:00発の列車で、ナポリ中央駅へ11:10に着いた。ナポリは初めてである。ホテルに早く着きすぎて、部屋に入れないので、荷物を預け、駅の構内を散歩した。コーヒー、ケーキ、サンドウィッチなどの店があり、ここをよく利用することになる。やっとホテルには入れることになり、ポーターが荷物を運ぶ。何となくチップを要求するようである。チップについてはナポリとローマではちょっと違う。1ユーロは大体135円くらいだった。

ホテルで、スーパー・マーケットと郵便局の場所を教わった。そしてナポリのバス観光を申し込んだ。

夕食は、ホテルで聞いて、二軒隣にあるレストランでとった。「ロブスターのスパゲッティがある」とあったので、嬉しくなり、早速注文した。すると、「ロブスターが切れている」というのだ。店の推薦で、「鱈のスパゲッティはどうだ」というので、それにした。だが鱈ではないようだった。ここは魚の出る店で、ナポリは海に近い。

我々の勘定の時、ウェイターがお釣り数ユーロを、チップとしてだろう、黙って持って行ったので、ワイフは怒っていた。値段は47・15ユーロで、ワイフは50ユーロ札を出した。尤も「サンキュー・マダム」と言っていたそうだ。北イタリアでは正確にお釣りを出し、ウェイターはそこから、もらおうとすればチップを貰う。

21日 泊まりはスター・ホテル・テルミナスである。駅の近くであった。ナポリでは駅近くでなく、市内にホテルをとる方がよい。フロントでダンボールをもらった。イタリアのホテルではなかなかくれないものである。郵便局は駅の横にそった道を行き、10分くらいで着くという。そこで荷物を持たずに出かけたが、なかなか着かない。とうとうポストだという建物が

あったので、「荷物を送りたいのですが」と言うと、「それは、この先の郵便局だ、ここは事務所だ」とのことである。しばし歩いて、やっと郵便局にたどり着いた。戸を開けると、まだ中にボタンを押して戸が開く場所に入り、その後、局内に入れる。用心深い。用件を言うと、「駄目、英語分からない」とのこと。そこで英語の分かる人が呼ばれて、「送りますよ」とのことだった。下検分をしておいてよかった。スーパーに寄って色々買った。くたびれて、明日また来ようということにした。

バス観光

午後から3時間のバス観光である。10人くらいが参加し、それぞれ別のホテルから客を拾ってくるのだ。「ナポリ・デイトライト」という名で、若いイタリア女性ステファニーさんがイタリア語と英語で街を案内する。一部は歩きで、ほとんどはバスの旅である。

ピアッツァ・デル・プレビソトにゆく。ここにあるイエズス会のジェス・ヌオヴォ教会は、壁が、小さな低い四角錐の多くの石で張られている。この内部は写真で見ると、素晴らしい。1584年着工で、これでナポリにバロック芸術が始まった。その前に広場がある。ここから旧市内を歩いて見た。

ナポリ旧市内は道が狭かった。途中でサン・ドミニコ・マッジョーレ教会があった。1283—1324年にかけて建てられた。寺院は初めロマネスク、その後ゴシック、1670年にバロックで作られた。前にサン・ドミニコ広場がある。だが広くない。広場の中央にサン・ドミニコの尖塔・オベリスクがある。1656年に、この町を疫病から救ったとされる聖ドミニコのために建てられた。広場の三方に宮殿がある。ここでトンマーゾ・カンパネッラが学んだという。それを後にガイドが教えてくれた。カンパネッラは、1592年にナポリにやってきて、ナポリでジャンバチスタ・デッラポルタ（1538-1615）に教わった。デッラポルタは、博学者・医師で、魔術師と錬金術師と近代科学者との中間にある。『自然魔術』（1558年。講談社、で抄訳あり）を出した。裕福な家で育った。トンマーゾ・カンパネッラはこの教会で生活したのであろう。カンパネッラは1592年に『感覚哲学』を出し、追放される。そしてフィレンツェやパードワへ向かうのだった。

さて我々が案内されたこの古い道では、いくつかナポリ名物が作られ、売られている。コルポ・ディナポリというナイル川の擬人像がある。このあたりは物騒な所だ。この路地見物を終わって、新しい地区へ移る。

ギャラリー・ウンベルト1世（ウンベルト1世はヴィットリオ・エマヌエレ2世の息子）の近くを通る。ここは修理中なのか、入らなかった。コレラ禍の後にスラム街が撤去され、1890年にできた。写真によれば、ミラノのヴィットリオ・エマヌエレ2世ギャラリーと似ている。ロイヤル・パレスを通り、サン・カルロ・テアターを通った。ここでオペラ「トラヴィアータ」が上演されていた。うらやましい。

市心で、大変有名なカフェがあって、そこを見物した。「ローマ法王も来たし、各国大統領も来るところです」と言う。ケーキが有名でおいしいと言うので、買って食べる人もいた。その人たちは時間がないからカウンターで立ち食いである。客が大勢いた。プレゼントに買う人もいた。アメリカ人女性が、ナポリの友達に頼まれたという。「あとで、これでお茶をするの」と

嬉しそうだ。

バスに戻った。カステル・ヌオヴォの前である。そこからバスで、ナポリ・パノラマを経験し、ヴィタ・カラテオロ、メルゲリーナとポシリッポ、その後、スパーツカ・ナポリつまり、ゲス・ヌオヴォ・サンタ・チアラ・チャーチに行く、というものである。

ナポリの丘へ向かう。そこは高級住宅地であり、丘から海が見える。あの海岸で映画「太陽がいっぱい」(ルネ・クレマン監督、アラン・ドロン主演(1960年))が撮られたのだなあと、思い巡らす。夜景はさぞ美しかろうと思う。

バスは帰りにそれぞれの人を下して、我々が最後になった。駅前ホテルだからだ。その辺は交通渋滞である。

ナポリにはジョルダノー・ブルーノ像がある、というが、見られなかった。彼はこの近郊の生まれである。ナポリは、ヴェスヴィオス火山、ポンペイ遺跡、カプリ島、を見るための観光の起点である。われわれはこれら3つを全く見ない旅であった。

夕食は、昨日と同じ店で取った。テーブルを1つおいた隣の席に、日本人の若い観光客夫妻がいて、大きなピッツアだったので、写真をとっていた。6—7日間のイタリア観光で団体で来たようだ。勘定の時、ウィフは昨日に懲りて、書かれた金額通り、きっちり払った。するとウェイターは「OK? マダム?」と言うので、ウィフは「OK」と答えた。チップを要求されたのである。これでウィフはこの店に行かなくなった。

ただし、どこかで見たが、ナポリでは15%のサービス料を要求しますということが書いてあった。サービス料は伝票に入っていた。

スーパー・マーケットにたびたび行く。ナポリでは駅前から左に伸びる道の延長にあった。この通りは、不穏な感じがする。色々な人種が道にたむろして、また、道路で小商いをしている。乞食もいる。物売りもいる。道路が何となく汚い。

23日 郵便局が夕方5時まで開いている。我々は貰ったダンボールに荷物を積み込んで、送りに行った。場所が分かっているので間違えない。英語が出来る人が出てきて、送る算段が出来た。だが係の人は仕事が遅い。船便3—5kgが42ユーロ、5—10kgが55ユーロ、10—15kgが70ユーロである。5kg 足らずで42ユーロで送ったので、持っているすべての荷物が少し軽くなった。日本に届くのには28日かかると言う。

カステル・ヌオヴォ

2つの城を見ることにした。まずカステル・ヌオヴォに向かう。新城という意味である。ここへはメトロが1番いいというので、駅前つまりガリバルディ駅から乗った。この切符を買うのが難儀で、地元のイタリア人も苦勞していた、発券機に硬貨を入れても、一度では出てこない、何度も落ちてくる。硬貨をこすって入れている人がいる、全く理由は分からないが、汚れていると機能しないのではないかと思える。イタリアの機械は性能が悪いのだろう。地下鉄の駅を降りて地上に出ると、目指すカステル・ヌオヴォが大きく見える。メトロを出てすぐに土産物屋があるので、店の人とお喋りしながら、絵葉書を買う。そして城へ向かった。

城は、ナポリを支配したアンジュー家(1)の王宮で、小森谷書によると、シャルル・ダンジュー

が1282年に作り始めた。その後1441—1503年にも改造された。

城には深い堀が巡らされている、だがそこに水はなかった。白い凱旋門が入り口で、両側に灰色の円筒状の塔がある。入城料を払うと、中庭から3つの見学できる入り口があると言われた。まずその右手から入ってみた。初めはこの城の所有であろうか、古い絵画の展示である。これは市立美術館で、15—19世紀のナポリの絵画が展示されている。上の階に上がると、広いテラスがあり、ここからナポリの海や港、一部の街が展望できる。中央の入り口から城内に入ると、そこは祈祷院であった。中庭正面になる。パラティーナ礼拝堂でアンジュウ一家のものであった。床には所々、墓が埋められている。第三の左手の入り口に向かった。係員がタバコをふかしているの、私も吸おうとしたら、「駄目」と言われた。「貴方は吸っているじゃないか」と答えると、「私はアンジュウ（例外）だ」とのことだった。今から説明が始まるとせかされて、数人の見物客のグループに加わった。まず招き入れられたのは、監獄であった。円い天井で広い部屋である。窓というか明かり取りが1つあるだけなので、普通は暗いであろう。エレベーターで階上にあがると、広い部屋へ出る。この隅からきわめて急な回り階段が下に通じていて、監獄へゆけるらしい。あまりに急で、落ちてはいけないので、1人ずつ見せる。

この階から、隣の建物の一階で祈祷会が盛大に行われているのが見えた。

見学が終わってこの城の男性ガイドとお喋りした。彼は日本語が片言できる。「はじめまして」などである。有名な日本の都市へ幾つか行ったと言う。ちなみに、西欧の挨拶と日本の挨拶を較べると、日本では無味乾燥である。「こんにちは」は、欧米では「良い日を」である。日本の「初めまして」では、欧米では「お会いできて幸運です」となり、意味づけが違う。一種の希望、プラスの表現が入るわけだ。そういうことなんだと、彼に言ったが、わからなかったようである。

彼は、「カンパネッラがこの城の監獄にいたことをこの人は知っているよ」、と近くにいた係員に言うと、その係員は、指さして、「ここにいたのですよ」と私に教えてくれた。「今は入れませんが」と。それは、城に入るときの、中庭の右手手前の部分であった。我々が見学した牢獄とは丁度反対側になる。

この城で、滅多にいない敬虔な教皇ケレテティウス5世が1294年、選出されて5ヶ月で教皇を辞めた、その場で行われた教皇選挙でボニファティウス8世が選出された。教皇が生前に辞任するのは史上初めてで、ボニファティウスは、伝声管をつくって、毎晩、寝ていた前教皇の枕元で、「辞めるべきだ」と言わせていた。

城を出る、正面左手に小さな門があった。そこにホームレスがいた。城の隣はムニチピオ広場になる。

有名カフェでの珍事

昼食をしようということになるが、「観光バスで知った有名なカフェに行こう、ここで何か食べよう」と決めた。「サンドウィッチもあったようだし」と。前日覚えた道を通ってそこへどり着いた。ガンボリヌスという店で、キアイア通り一番地にある。この時、店の座席にはお客はほとんどいなかった。「ケーキを食べて昼食代わりにしよう」ということになった。座席に案内されると、部屋は大変綺麗で立派だった。流石だなと思う。店に入ってすぐに、ケーキ類が

ガラス・ケースに展示されており、これを選び、ウエイトレスが持ってくる。私は酒のしみたケーキを1つ選んだ。ワイフは2つも選んだ。「2つも食べるの」と聞くと、「2つとも有名とされるものだから」とのことであった。私はそれにアイス・コーヒーにした。これには氷が入っていないで、冷たいだけなのでよかったし、おいしかった。氷が入っていると、終わり頃にコーヒーが薄くなってしまう。ワイフは紅茶を頼んだので、ポットに熱い湯がはいったものが出された。テーブルのティーバックから好きな紅茶を選んでポットに入れる仕組みである。ヨーロッパ中、ティーバックが多いので、味気ない。

私は終って、外でタバコを一服した。屋外では客はいた。戻ってくると、ワイフが怪訝な顔をしている。この間の話はこういうことだった。ワイフは勘定を頼んだ。ウエイターが勘定書を持ってきた。かのウエイトレスではなく、かの女は運ぶ役だけらしい。ワイフはお金を払った。ウエイターはお釣りを持ってきた。勘定書きを見て、ワイフは怪訝に思った。ケーキはガラス・ケースでは、バーバが2・5ユーロ、リッカが2ユーロ、ヴェスヴィオが2・5ユーロである。それが全部2倍なので、14ユーロになっている。これは室内で食べたから、そうなのだろうと思う。これはしかたがない。あとのコーヒーは5ユーロ、紅茶は6ユーロの請求になっているが、本来の値段は分からない。全部合計で、25ユーロであった。そこでワイフは50ユーロ札一枚を出した。ナポリでだ。だが返ってきたのは、15ユーロだった。そうすると10ユーロ減っている。この時、ウエイターは「サンキュウ・マダム」と丁寧に言って帰って行ったという。結局10ユーロをチップとして持って行った。ワイフは、「チップはいいけれど、1350円のチップは多すぎる」と、かんかんなのである。

私はトイレに行った、しかし番人がいてチップが必要らしいので、また席に戻ってチップの小銭を持っていった。

我々の話の最中に2つの水のグラスが出た。私は珍しいことだと思った。

我々が盛んに議論し、ワイフは、「やはりレジでたしかめてくる」と言ったまさにその時である。主任のウエイターがきた。彼はかつてのウエイターとは違う人である。彼はすかさず、テーブルの下を見て、手をさしのべて、「マダム、お金が落ちていましたよ」と、お札を我々のテーブルの上に置いたのである。何と、10ユーロ札である。ワイフは一瞬躊躇したが、まもなく受け取った。彼は私の近くのテーブル・クロスも持ち上げて、「他には落ちていないようですね」と言う。ここのテーブル・クロスはとても長く、床にとどきそうなものであった。我々は一種あつけにとられていた。彼が去って、どういうことなのか解明し始めたが、「いや、よそう。表に出て語ろう」ということにし、店を出た。

店の前で我々は分析した。ワイフは、「変だ」という。「私はお金を落としていない、それに主任ウエイターは、床からお札を拾い上げていない、床には落ちてはいなかった。手に持っていた」というのだ。これで分かった、我々が勘定書きを丹念に見て検討し、白熱の議論をしたのを見ていた主任ウエイターが、おそらく、かのウエイターともちょっと話しをしたのだろうが、どうもチップをとられすぎだと、お客が相談しているのだろうと判断したのだ。そして落ちてもない10ユーロ札を、「落ちていましたよ」と言って、返したのだ。「チップの取り過ぎですみません」とは、みっともなく言えないだろう。

そこで私は、これはいつもこの店が使っている手段だと思った。急には思いつかない。マニュアルがあるはずである。流石に老舗だけある。ワイフは、もう2度と来ないと言った。帰国後、イタリア通の知人にこの話をすると、「日本人だと思って、取って行ったのだろう」と言う。

この近くはトリエスト・エ・トレド広場といい、20世紀初頭まではサン・フェルディナント広場と呼ばれた。地図によると、この店の近くからフニコラーレが出ている、とある。その駅は地図ではFで現されている。これは登山（高山）電車のことであった。ちょうどパトカーがいたので、駅を聞いたら、近くにあった。フニクリ・フニクラは、本来ヴェスビオ山の登山電車で、有名な歌も作られた。ヴェスビオ山が噴火して、これが廃止され、今度はナポリ市内に作られた。一本はエルモ城の近くへ行く。もう1本は少し離れた所へ行く。計4本あるとのことである。

登山電車に乗る時、持っていたメトロの切符では、乗れなかったが、駅員が乗せてくれた。旅行者だったからだろう。急坂を電車は登る。着いてみると、高級住宅地であった。エルモ城という矢印があるので、それにそって進むが。かなり歩く。屋外の道路にエスカレーターもあった。

カメオ

のんびり歩いていると、何の警戒心も起こさないような中年男性と一緒に、話しかけられた。道を教えてくれながら、「私はカメオの工房を持っている」と言うのだ。「作っている所を見せてあげる」と言う。時間は少しあるので、見せて貰うことにした。ところが結局見るだけでは終わらないことになる。

行った先はカメオの店であった。親子三代でやっていると言う。彼の兄が経営している。職人も2人いた。

カメオはブローチやペンダント・ヘッドのアクセサリーである。シャドニックまたはコンヨーラという貝で作る。大きな貝で、ピンクと白の部分がある。マダガスカルから輸入している。本物のカメオは軽い。図柄はほとんど女性の横顔だが、二割くらいは他の絵もある。店主はカメオの箱を出して見せてくれた。「プロフェッサーとティーチャーとスチューデントの三クラスがあって、それぞれ、作った人により値段が違う。」これは、マイスター、職人、徒弟のことだろう。「ヴェネチアのムラノ島のガラスとナポリのカメオが、イタリアでは有名なのだ」と言う。

ワイフは何だか買わざるを得ない状況となり、小さいカメオの一つ買った。店主は、二割まけるという。円で計算したら少し端数が出たので、その端数をおまけしてもらった。「日本で買ったら、六倍高いですよ。奥さん、買い物、うまい」などと、彼はいう。ワイフは、カメオに興味はあったが、買おうというほどでもなかった、らしい。

すぐ隣がエルモ城であった。我々を誘った男は何者なのだろう。カメオ職人ではないらしい。客を誘い込む人なのだろう、と推測した。

エルモ城

エルモ（あるいはテルモ）城に入った。ウォメロの丘の上に立っている。カステル・サンテルモといい、聖エルモ城という訳になる。12世紀にノルマン人が物見櫓ペルフォルテを作り、

そこにアンジュウ家のロベール王が築城した。1329年に完成した。

エレベーターで三階まで行く。そこはもう屋上になっていて、周囲の見晴らしがとてもよい。高い山の上にあるので、風が強い。二階部分が1番面白いだろうと思うが、そこには入れない仕組みで、拍子抜けがした。城を出るとき、近隣の人なのだろう。知人たちを案内している人と喋って、「ここだけなのか」と聞くと、「入口の横手の方から坂を上がって城と通じる道がある」と教えてくれた。早速その道を歩いた。そここそ、昔の入り口であり、門があり、降ろし戸があり、長い坂が続く。途中で牢のような部分もある。がっしりした石の坂道である。上り詰めると、かつて見物した屋上に出た。こういう作りだったのか。16世紀スペイン支配下で、ドン・ペドロ・デ・トレド租特がが改築した。1587年に弾薬庫に落雷し、城が吹き飛んだ。聖エルモ城の牢で、トンマーゾ・カンパネッラは「太陽の都」を書いた。

エルモ城には資料や案内書が売っていないので、とてもつまらない。しかし後で、ナポリ鉄道駅の書店で『エルモ』なる本があったので買った。

この城はまた1つ歴史に出てくる場所である。というのは、ロシアの皇太子アレクセイ(1690-1718) (2)の逃亡先だったのである。彼はピョートル大帝の息子で、長男である。しかし結局、大帝によって殺されてしまうのであった。彼がロシアからウィーンに逃げ、チロルからイタリアへ来て、このエルモ城に隠れた。これをロシアの追っ手がかぎつけて、アレクセイに帰国を促し、愛人とここに隠れていたアレクセイは騙されてロシアに戻るのである。(3) 彼を追求し、騙して連れて行った官僚は、有名な大作家トルストイの先祖である。

帰る

エルモ城を出ると、かのカメオ店があるので、再び立ち寄って、写真を撮ったり、他の装飾品を見物させて貰った、近所にはカメオ店がまだあるようだ。我々を誘った男性がいないので、「どうしたのか」と聞くと、「ランチに行った」とのこと。随分遅いランチである。登山電車の駅の場所を聞いて、我々は歩き始めると、駅はすぐそばだった。歩いて4分くらいなのだ。初めに来た登山電車とは路線が違っている。この駅の前で、かの男性とばったりあった。そこで愉快にお喋りをし、「登山電車の終点からナポリ中央駅へ行くメトロの駅はどこか」ときいた。すると、「登山電車を降りたら左へ行け、そうするとすぐある」、とのことである。エルモ城のあたりは金持ばかりで、マンションや高級住宅が並び、「治安は悪くない、駅前治安が悪い、掏摸が多い、ナポリはピッツア・マルゲリータが有名で、おいしい」と。我々は、このピッツア・マルゲリータをナポリで食べ忘れた。

登山電車に乗った。切符は改札口の雑貨屋で売っていたので、便利だ。1・2ユーロくらいだ。帰りは慣れたので、外の景色をゆっくり見た。こんな高い所でも、この電車があるから生活は不便ではないだろう。電車は10分くらいだ。

終点で、降りて、左へ行けと言われたので、そうしようと思ったが、左には道が三本あるので弱った。3人ほどに聞いたが、よく分からない、英語が通じない。四人目の人がやっと教えてくれた。メトロではプラットフォームの方向を間違え、渡り移った。電車がきて、乗っている人に「ガリバルディ？」と聞いて、「イエス」と言うので、飛び乗った。この人は黒人で、話してみると、ナイジェリア人だった。「ナイジェリアでは石油が沢山生産される」と言うので、

「そう、世界第三位です」とのことで、うれしそうな顔をした。とても良い顔をした人だったが、「無職だ」と言った。「日本人でしょ」と言う。「どうして分かった」と、聞くと。「鞆を前にしているから、分かる」と言う。駅に着いて、「サンキュウ」と言って分かれた。

駅前ホテルの前に立っていると、色々ある。種々の物売りがいる。雨が降ると傘売りが立つ。多くは黒人や中近東の人である。タバコを吸っていたら、「火を貸して下さい」というのはいいが、「タバコ下さい」と来る。ある男性は、「アリガト」と返事をした。ある老婆がやはり、「たばこ下さい」と来た。老婆が吸うのかな、と不思議に思ったが、一本あげると、「もう一本くれ」と言うので、断った。ずうずうしい。多分これ売るのはないか。高校生くらいの数人の男女が「火を貸してくれ」と来た、しかし、言葉を交わすと、「イタリア語しかわからない」とのことだった。

この日は大にぐたびれたので、このホテルのレストランで夕食をとることにした。ワインがおいしかった。リーモン・チェロ(=レモン・リキュール)を頼んだら、これは食後酒だと言われ、応じてくれなかった。そこで食後に頼んだが、名物ではあるが、それほどおいしいとは思えなかった。知人の日本女性は、おいしいと言う。

イタリアは交通信号があまりない。ローマ、ナポリ、赤でも人は渡る。渡れない赤もある。

24日 ナポリ駅で列車を待つ間に、いつもの駅内の店でコーヒーを飲む。ここは店で飲むのとテイク・アウトとは値段が違う。われわれは南イタリア旅行に向かう。

30日 南イタリア旅行が終って、再びナポリへ戻った。13:00に列車が着いた。ナポリで時間があまり、またスーパーへ行く。お土産を買うのだ。初めのホテルと同じスターホテル・テルミナスである。今度のナポリは、旅行社が途中で泊まった方がよいでしょうと、気を利かせて泊まることにしただけであった。しかしローマまで1時間10分だから、その必要はなかった。朝食時、隣に座ったご夫婦とお喋りした。ご主人は退職した先生で、デンマーク人だ。レンタカーで、シシリア旅行をする。特にパレルモ中心のシシリア旅行は人気がある。写真を撮り合った。私はトンマーゾ・カンパネッラを求めて旅をしたと言ったら、「その名を紙に書いて」と言うので、書いたら、「知らないなあ」と言うのだった。「帰ったら調べる」と言った。北欧あたりでは知られていないのだろうか。後日写真を送ったが、写真を送ってくれた。

31日 ナポリから10:35発の列車が、天候のせいで大幅に遅れ、ワイフの活躍で、駅員に違う列車に替えてもらった。それは11:00発となった。イタリアでは汽車はよく遅れるとのことである。しかし我々は10回利用して2回遅れただけだから、それほどでもない。

指定席に向かって歩きはじめた時、老ポーターがついてきた。ワイフは警戒してずっと離れて歩いた。ポーターが私を案内する。ワイフは「何故ポーターなどと一緒に歩くのか」と怒っている。我われのワゴン車に到達した時、ポーターは手を出してチップを要求した。しかし彼は荷物を運んでくれなかったのだから、私はチップを払わなかった。

ローマへ11:47着が12:12着になる。車中では、イタリア女性とお喋りし、彼女は、日本の幾つかの都市を旅行したと言う、そして「ナポリは古い歴史がある」と、誇る。私も鸚鵡返しに同じ返答をした。隣に若い中国女性が座っていた。「私はローマに行く」と、漢字で書いたが、何と彼女は英語を話すのだった。彼女は全く応答をしなかった。

ナポリの政治史

BC.7世紀ころ、ギリシャ人が建設したネアポリスがナポリの起源である。その後、多くのギリシャ都市がイタリアで作られた。紀元前202年に南イタリア全体がローマ国の支配下に入った。79年にヴェスヴィオ山の大噴火が起きている。476年に西ローマ帝国が滅亡した。その後、5世紀に、ヴァンダル族とゴート族が侵入する。東ゴート族が493年からイタリアを支配する。535年から、ビザンツ軍がイタリア半島で東ゴート族と戦う。つまり東ローマ帝国のユスティニアヌス帝の再征服を受けた。

その後、568年にランゴバルト族が南イタリアを領有する。661年にナポリは公国となる。9世紀初から中ばにイスラム教徒がイタリア南部を侵攻する。

1139年にナポリはノルマン人のシチリア王に降伏する。1140年にノルマン人に支配され、ノルマン王ルッジェーロ2世がナポリ湾に卵城を作り、要塞とした。ルッジェーロ2世のあとをグリエルモ1世らがついだが、その後シチリア王家で子孫が途絶え、1194年にホーエンシュタウフェン家のハインリヒ6世・シチリア王に支配された。1198年には同家のフェデリコ2世に継承され支配された。フェデリコ2世は1224年にナポリ大学を作った。役人養成のためだった。

1250年にフェデリコ2世が病没し、これでホーエンシュタウフェン家が断絶し、フランスのシャルル・ダンジューが1266—68年に南イタリアとシチリア王位を取った。つまりローマ教皇によりシチリア王に封ぜられ、そして戦争により南イタリアを手に入れた。彼は首都をパレルモからナポリに移した。ここからナポリ王国と呼ばれるようになった。アンジュー家が来た時、1282年にカステル・ヌオーヴォが着工された。5年で竣工した。この1282年にシチリアの晩鐘事件でアンジュー家はシチリアを失い、ナポリだけを支配した。アラゴン王ペドロ3世がシチリアを取る。シチリア王国は2つに別れたわけだ。ナポリでは1309年に、3代目ロベルトがナポリ王になった。14世紀初、ナポリ大聖堂が完成した。これはかつてシチリア王シャルル1世によって建設を命じられていたものである。1382年ドラッツォがナポリ王になった。1435年にアンジュー家が断絶し、1442年にスペイン・アラゴン家が継ぐ。このトラスタマラ家のアルフォンソ5世はシチリア王でもあったが、アルフォンソ1世として1443年ナポリに入城し、ナポリ王になった。2つの王国の王になったのだ。この年、彼は文芸サロンを作り、それはナポリ大学の始まりだった。1479年にアラゴン家とカスティリア家が合同したので、それがスペイン王国となる。1480年に1年間、イタリアの南部の一部がオスマン帝国に占領された。アルフォンソはナポリで長く統治した。1458年にこの王が死し、私生児のドン・フェランテがフェルディナント1世としてナポリ王位を継ぐ。

しかしフランスのシャルル8世がこれにつけ込み、ナポリを武力占領することになる。彼が1494年にイタリアに攻めてきた。フィレンツェ、ローマと進軍し、1495年にナポリに入城した。このフランス兵が略奪したので、ナポリ市民に敵意をもたれた。さらに、ローマ教皇、ヴェネチア共和国、ミラノ公国、神聖ローマ帝国皇帝、スペインのフェルナンド5世が、反フランスの同盟を結成したので、シャルル8世は一部を遣し、やむなく帰国する。多くの美術品と、書物、そして梅毒を持ち帰った。

1504年からスペインがナポリを支配した。スペインの大司令官ゴンサロ・デ・ゴルドバは1503年にナポリを占領し、フランス軍を追い出し、最初のスペイン総督になった。スペイン・

アラゴン家は1504年にナポリ王宮を作った。1503—1707年はスペインが南イタリアを属国化した。1534年からトルコ海賊が南イタリアを攻めてきた。1647年、マザニエッコによるナポリの貧民の暴動が起きた。彼はメルカート広場で処刑された。1504年からのスペイン支配体制は、1713年にオーストリア・ハプスブルク家領に替わった。1707—34年、南イタリアはオーストリアに統治される。つまり、スペイン継承戦争中にオーストリア・ハプスブルク軍が1707年にナポリに入城し、スペイン総督が追い払われた。オーストリア支配は1734年まで続く。

1733年にポーランド継承戦争が起きて、1734年からスペイン・ブルボンのカルロ3世つまりパルマ公ドン・カルロスがナポリに入城し、1735年にカルロス7世としてナポリ王として即位し、オーストリアからナポリを奪った。彼はシチリアも得た。こうしてスペイン支配に戻った。その24年の治世で評判がよかった。1752年にカルロス7世はナポリ郊外に巨大な王宮を建設し始め、カゼルタ宮殿である。建造には28年かかり、経済的波及効果が抜群であった。1759年、カルロスは、息子のフェルディナントに王位を譲った。

1798年にフランス軍が侵攻し、このブルボン王はナポリを追放され、シチリアへ逃れた。1806年から14年まで、ナポレオンの兄ジョセフ、その後妹婿ミュラがナポリ王になった。ナポレオン体制が壊れると、1815年にブルボン家が復位し、フェルディナントが帰国した。両シチリア王国が再生した。

1821年、ロスチャイルド家は四男カール（1877-1855）をナポリに送った。この年オーストリア軍がナポリを占領したので、好機と見た兄ロスチャイルドが弟を送ったのである。カールはフランクフルトで銀行業を学んでおり、両シチリア王国で銀行を立ち上げ、ナポリの主要銀行にした。彼の後を二男が継いだ。1901年まで銀行は続いた。

1830-69年はフェルディナント2世の時代であった。リソルジメント運動の中で、1860年にガリバルディ軍がナポリを征服し、両シチリア王国が滅び、1861年、サヴォイア家の統一イタリア王国に編入される。ナポリの政治はめまぐるしい。

その後はイタリア全土の歴史と共に歩み、第1次大戦に参加し、またファシズム時代を経る。第2次大戦中、ナポリ市民はドイツ軍を駆逐した。

ナポリ出身の有名人には、ベルニーニ、ブルーノ、ヴィーコ、カルーソーがいる。

- (1)アンジュー家。フランスの王家カペー家の支流。フランス王ルイ9世の弟シャルルが1247年にアンジュー伯になり、1246年にプロヴァンス伯になり、1266年にシチリア王になった、この時、南イタリアを得た。シャルルはその後、シチリアを失うが、ナポリ王にとどまる。アンジューはフランス西北部の1州。
- (2)ピョートルの始の妃エヴドキア・ロプーヒナとの間の息子。
- (3)土肥恒之『ピョートル大帝とその時代』中公新書、アンリ・トロワイヤ『大帝ピョートル』中公文庫。文献について、土肥さんは最近の『人文研究』で書いている。

参考) 小森谷賢二・慶子『ナポリと南イタリアを歩く』新潮社 2011年

沢井繁男『ナポリの肖像』中公新書。寺尾佐樹子『ナポリの街の物語』